

冬の

かいだん・怪談・KAIDAN

怪談とは？

広辞苑では「ばけものに関する話」。妖怪、幽霊、鬼、狐、狸といった存在が登場する、迷信的な口碑（こうひ）や伝説を指すと定義されています。つまり、創作されたものが根本です。

平安時代の「今昔物語集」、室町時代の「百鬼夜行絵巻」からも、当時の人々が、妖怪という創作を愉（たの）しんでいた様子が想像されます。江戸時代には日本三大怪談といわれている「四谷怪談」「番町皿屋敷」「牡丹燈籠」が登場しました。歌舞伎や浄瑠璃、読物の「雨月物語」といった恐怖やスリルなどの刺激を味わえる怪談が、娯楽として需要が高まっていったようです。夏の暑さを忘れるためや、「先祖の霊が里帰りしてくる」お盆と重なることで、日本では夏の風物詩として怪談が語られています。

そして、英国では怪談は冬の風物詩です。英国は冬が長く、日の暮れも早いので、長い夜、家族や友人達と暖かい暖炉を囲みながら、怪談話に興じることが冬の楽しみなのでしょう。また、19世紀に文豪ディケンズにより3人の幽霊が登場する「クリスマス・キャロル」が出版されてから、冬に幽霊話を楽しむことが一般的になったという説もあります。

日本で冬が舞台の怪談といえば、雪深い山奥での遭難や極寒の中で起きる心霊現象などを題材にした物語が多いです。岡本綺堂の「妖婆」などもありますが、小泉八雲の「雪女」が一番に浮かびます。英語圏の読者のために英語で創作した「怪談」の中に収録されている一遍です。

『江戸の怪談がいかにして歌舞伎と落語の

名作となったか』 櫻庭由紀子／著

笠間書院 2022 388.1



表紙のかわいらしさとは真逆の内容がぎっしりと詰め込まれている本です。日本三大怪談のほか有名な怨霊「累(かさね)」のような怪談の元ネタ

を調べ上げている内容がとても興味深く、娯楽になった演目を鑑賞したくなります。

『怖いこわい京都、教えます』

入江敦彦／著

新潮社 2007 291.62



歴史を感じる魅力的な観光地、「京都」の怪しい裏路地に入ったような八十八話のエッセイです。神社仏閣への拝観が怖くもなりますが、一番こわいのは人間の「いけず文化」かもしれません……。